慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治経済学の意味
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.6 (1941. 6) ,p.732(34)- 758(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19410601-0034
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410601-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政治經濟學の意味

氣賀健三

一、政治經濟學の問題
二、經濟の政治化の現象
三、シュパンの形而上學
四、ウェーバー及びゾムバルトの認識批判的見解とゴットル
五、目的論的觀察方法
六、歴史的必然性の意味
七、世界の問題

一　政治經濟學の問題

經濟に對する政治の優越といふことは、ドイツに於いてヒトラーが政權を把握するに至つてから、彼の信條として、又はナチス黨の綱領として、廣くドイツ國民に宣傳され、敎へこまれるに至つた。而してそれは流行語となり、一種の現代の合言葉の如くにまでなつて、ドイツ一國に止まらず、我國に於でも學者の間に頻りに論議せられつゝある狀態である。

ヒトラーは一九三三年のドイツ國會に於て次の樣な演說した。

「國民は經濟の爲に生活するものに非ず、經濟は資本の爲に存在するものに非ず、否、資本は經濟に奉仕し、經濟は國民に奉仕する」と。

政治的意思がドイツ國民の經濟を指導し、經濟は總て政治目的の爲に喜んで追從するといふナチスの世界觀を如何にして理論的に又は科學的に基礎づけようかといふことは、現代ドイツの幾多の學者の仕事となつたのである。かゝる考へをば單に一指導者の信念とのみ解せず、單に一政黨の綱領と見做さず、廣く何人をも承服せしむる理論的根據を持つ政策原理として、中外に適用せしめようとするのが彼等の仕事となつたのである。

此仕事を達成しようとする希望は、ドイツ國民社會主義の世界觀をば、世界觀としてゞなく、ドイツ國民の客觀的、必然的な唯一の要求と見做し、此要求をば理論に依つて客觀化し、歴史に依つて必然的性質を證明しようとすることになる。其處で所謂る歴史と理論と政策を統一する「政治經濟學」が企てられるに至るのである（註）。

（註）數年前から始つて今日に至つても猶ほ繼續して居る所のドイツに於ける「新しき價値判斷論爭」は實に理論と政策の分離又は統一の問題を繞つて容易に果てさうもない。此論爭は我國に於て、西川淸治氏（經濟學雜誌）に依り、又板垣與一氏（一橋論叢）の明快詳細なる紹介等に依つて廣く知られて居る所であらう。

二　經濟の政治化の現象

國家を單位とする所の國民生活に於て、政治生活と經濟生活とが別々の領域を占めると觀て、前者は後者を指導するといふ實際社會に現れる表面上の幾多の現象を指摘し、それに依つて政治は經濟に優越することを斷定し得るとするならば、問題は頗る簡單である。

自由主義的な經濟政策が經濟構造の變化に連れて退却し、之に代つて國家的干渉が大いに要求されるに至つたといふことや、又戰爭目的に備へて經濟機構の再編成が望まれるに至つたといふことは、確かに明かな事實である。此等の事實を指して從來の經濟に對する政治の優越と解するならば、それは勿論一つの解釋として認められるけれども、問題の本質を捉へたものではない。

國民經濟が國家的干渉を多く必要とするに至つたといふこと、平時經濟を戰時經濟の爲に再編成するに至つたといふことは經驗的事實である。このことからして經濟理論が政治化されるといふ主張は、直ちに生れて來ることはできない。このことから直ちに經濟は手段であつて、政治は目的であるといふ關係を推論することはできない。

何故經濟は手段でなければならないか。經濟は其自體目的を持ち得ないであらうか。一個人が經濟的福祉を希望することは獨立の目的となり得ないのか、「國民が經濟的安寧を追求することは獨立の目的となり得ないのか。國家の政治的活動は人民の經濟的福祉を、國民の經濟的安寧を追求しないものであらうか、或は之を追求しては何故いけないのか。政治經濟學は先づ此等の疑問に答へなければならない。

此等の疑問に答へる爲には、國家が國民經濟に單に或る政治目的の達成の爲に干渉するといふ事實のみを以てし充分でないことは明かである。蓋し國家が或政治上の目的の爲に一國の經濟に干渉するといふのは、現代のみの特有の現象でなく過去に於ても多かれ少かれ行はれたことであるからである。

假に政治目的は國民の生活を持續させ、發展させ、增進させるといふことであると、いふ定義があるとしても、その內容は經濟上の目的とも合致し得るものである。各個人に就ても、或は又一國民全體に就ても生活は唯一つしかないのであつて、政治生活と經濟生活とが別々に存し、政治目的が上位に、經濟目的が下位に在ると考へるのは大な誤りである。政治といひ、經濟といひ一つの生活の一局面であつて、相對立する領域ではない。政治目的といひ、經濟目的といひ、或目的の一面であつて、實際問題としては、互に目的となり或は手段となり得るものである。

三　シュペンの形而上學

表面の社會的現象の變化を通じて、經濟學に對する政治化を證明することはできないが、又形而上學の力を借りて之を證明することは、當面の要求に沿はないであらう。蓋し、それは一つの形而上學的な規範的經濟學を生むことになるからである。

普遍主義の形而上學を久しく說く所のオトマー・シュペンこそは斯樣な意味の規範經濟學者である。

シュペンに依れば、個人は全體の爲にのみ存し、全體は其自體として一個の獨立體であり、究極目的即ち價値の實現を目指して居る。彼の弟子リュトケの簡潔な言葉に依つて其主張を述べるならば、

「社會は自然を其對立物とするものであり、其自體二つの領域に截然と區別される。價値の領域及び手段の領域

が即ち之である。價値は直接の妥當性を持つ所の終局目的であり、其是認の爲により高位のものを要しない。其自らの中に此是認を持つて居る。『價値とは其故に、其自體の本質の力に依つて妥當する一切のものである』(List: Nationalsystem der politschen Ökoniomie, S. 20-21)斯くの如き價値とは聖、眞、善、美、貴である。此等の價値に對立するものが終極目的に役立つ所の手段の領域である。一方に於ては價値、他方に於ては存在の世界卽ち因果の世界に於ける價値實現は相分離せられる二つの物である。一つの價値を實現し得るものは總て皆手段である。手段は價値の實現者であり、其自體の價値を持つて居らぬ」(註)と。

（註）Lütke: Die Theorie der produktiven Kräfte, 1935 七〇頁

而して經濟は如何なる領域に屬するかといふに、それは完全なる手段の領域に屬する。經濟とは目的に役立つ手段の地位を占める。目的の重要性に從つて其實現手段に一定の選擇が行はれ、手段の世界、給付の世界は之に從つて一つの有機的構成體に組織される。經濟は給付より生ずる所の全體であり、經濟學の中心問題は給付概念及び給付理論に外ならない。

經濟を手段の領域に在るものと見るシュパンの解釋は、經濟的現象の觀察や分析から得られたものではなくして、之と反對に、超經驗的なる價値の世界から觀て、其地位に在ることを要求されるといふ本體論的規定に基くものである。リュトケの言ふ通り、「シュパンの基本概念たる範疇は彼に取つて『存在の根本樣式』(Spann: Kategorienlehre 四九頁)である。範疇の本體論的見解は、概念が論理的にのみ思考せられる結果として現實的にも亦存在するものでなければならぬといふこと、卽ち概念は現實の中に含まれて居るといふことを意味する。卽ち實在が概念より導出せられ、概念の存在することも亦概念から推論されるのである」(註)。

（註）Lütke 前揭書八五頁

價値判斷の基準を超經驗的な世界から持つて來ることは、現實的、經驗的なる政治經濟學論者に取つて容易に許し得ない所である。概念が先づ存し、現實は之に適合すべきものとすることが許されるならば、規範的科學の樹立に方法上の困難はない。併し斯くの如き方法は、理論と政策を統一することでなく、政策に從つて理論を作り上げるといふ一方的支配に歸するのである。

我々の判斷を飽くまで經驗の上に立てようとする素志を貫くならば、斯くの如き本體論的判斷に對しても猶ほ、「何故」といふ質問を投じてゆかなければならぬ。卽ちシュパンが經濟は手段として全體の或目的に奉仕しなければならぬと斷言する時、何故經濟は手段でなければならないかと問ふことが許される。之に對する本體論者の解答は、手段であるが故に手段であるといふ答以上をでることはできないであらう。

四　ウェーバー及びゾムバルトの認識批判的見解とゴットル

此樣な答に滿足することができなければ、人は再び振り返つて、經驗の中から滿足のできる理論と政策の統一を求めなければならぬ。

斯くの如き努力は、思へば嘗てゾムバルトやマックス・ウェーバーに依つて嚴しく否定されたものである。古典

學派の自由主義經濟學が經濟の理論的說明から直ちに自由主義の政策的主張を導き出すのは理論と政策を混同する誤りを犯すものと非難せられ、經濟學の中に倫理的觀察をも併せ用ひ樣とする歷史學派の主張は論理的判斷と價値判斷とを混同するものとして排斥せられたのである。經驗的認識の領域に於て、理論と政策とは統一することのできぬものであり、論理的判斷と倫理的價値判斷とは嚴重に區別されなければならぬものであつた。

マックス・ウェーバーは曩に其歷史的名著とも稱される「Objektivität…」の論文に於て、又ゾムバルトは近年"Drei Nationalökonomien"に於て、社會科學に於ける認識の客觀性の限界を說明し、究極の價値判斷の認識論的證明が不可能であることを論證した。

ウェーバーもゾムバルトも共に社會科學に於ける獨特の觀察法としての理解（Verstehen）に依る說明に從つて、社會現象の意味をよく把握しなければならぬことを指摘した。而して現象の意味を把握することは、人々の合目的な行動を本質的に理解する所以であるが、又それ以上を出でぬものであつて、根本規範の妥當性を立證し得ないといふことを確言した。

理解的方法が如何なる程度まで價値判斷の要求に答へ得るかといふに、それは人間の目的生活の現實の根本目的にまで溯つて之を客觀的に了解せしめ得るといへるのである。併し理解的說明は結局說明に止まるのであつて、根本的に溯つて選び出されたる或る生活目的が當爲の標準たる權威を何處から得て來るかは、理解に依つて說明し得ないし又、理解其自體が此權威を附與する資格を持ち得ないのである。人間の目的生活の何れの根本目的が他の目的を排して妥當性を主張し得るかといふことも、或る選ばれたる目的を當爲に置替へる根據は何處にあるかといふ點に於て、社會科學は自ら其決定力を持ち得ないのであつて、人は結局之を世界觀に、又は宗教的信仰に、又は形而上學に求めなければならない。其處へはどうしても超經驗的又は主觀的要素が入つて來る。

ウェーバーは、社會科學的認識の限界に就て次の如く述べた。

「價値判斷の科學的研究は、欲求せられたる種々の目的や其目的の根底に橫たはる理想をば、理解し且つ經驗せしめることができるが、猶ほそれ許りでなく、之を批判的に「判斷」することを說明することができる。が此批判は勿論辨證法的性質を持つものに過ぎない。換言すれば、それは歷史的に與へられたる價値判斷及び理念の中に表れる諸材料の形式論理的判斷、即ち理念をば欲求せられたるものゝ內的論理的統一性の要請に從つて吟味することに過きない。此批判は、それが此目的を自ら規定するが故にこそ、欲求者を助けて以て其欲求の內容の根底に橫はる最後の公理、即ち欲求者が無意識的に出發し、又は——徹底的に言へば——出發せねばならぬ所の最後の價値規準を反省せしめ得るのである。此最後の規準は自ら具體的價値判斷の中に表現せられるものであるが、之を意識せしむることは正に批判が思辨の領域に立入ること無しに果し得る最後のものである。判斷を行ふ主體が此最後の規準を認むべきや否やは主體の個人的事項であり、其者の欲求や良心の問題であり、經驗的知識の問題ではない」と（註）。

（註）Weber: Objektivität, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. 一五一頁

ゾムバルトは理解の限界を下と上とに就て説明して居る。下の限界とは即ち人間の行爲の意味が全く缺如して居る所に理解は到かないといふことである。例へば狂人の行動を理解することはできない。又精神分析の大部分（夢の判斷）は理解の領域外に在り、自然科學に屬する。それから又自然的現象と文化とが交錯する所に於て理解は停止する。之は勿論自然に意味がないといふのでなく、自然の中に在る意味を人は體驗し得ないといふことである。

理解は他方に於て經驗の領域や明證的並びに間接的な體驗の領域に於てのみ通用するのであるから、此領域を超えて絶對者の國へ思惟が入り込む時、換言すれば「文化的理念の內在的意味を超えて意味關聯を超越的な意味に附けようとする所に於て」、理解の道は絶たれるのである。玆に理解の上の限界がある。故に例へば經濟が何であるかを理解することはできるが、經濟が何でなければならぬかを理解することはできない。之を理解する爲に我々は神の精神を持たなければならぬ（註）。

（註）Sombart: Die drei Nationalökonomie, 1930 二三二—三頁

ゾムバルトとウェーバーに依つて經驗や體驗から直接に當爲の規範を選び出す途が斷たれたにも拘らず、近年に於ける政治的要求は再び此道に橋を作り當爲の世界に通ずる路を開拓しようとするのである。開拓者として今日最も勢力を持つ學者として、人はゴットルを擧げるに躊躇しない。彼は彼獨特の新發明語の爲に人々の容易に近づき難い難解なる説明を施すものであるにも拘らず、近年ドイツ本國に於て多くの信奉者を持ち、又日本に於ても多數の信者を持つて居る。

ゴットル主義者も亦理解に依る説明を社會科學に獨特の方法として採用する。而して此方法に從つて理論から當爲の規範を導き出すことができると信ずるのである。

彼等に於て共通なことは、人間の生活を直接に觀察し、生活其物に目的を發見し、目的を當爲の規範と看做すことである。

人間の社會生活が、或る種々の目的を持つた生活であり、其行爲にそれ〴〵の意味があるといふことは自明的なことであつて、敢てゴットルの説明を俟つまでもない。生活に動機があり、意味があるといふ認識は併し直ちに、其意味は充足されなければならぬものである、その動機は成就せられなければならぬものであるといふのと同義語ではない。

人間の共同生活は巨大なる出來事の流れであり、一つ〳〵の出來事に何等かの意味があり、而して之を了解することはできる。ゴットルは人間の生活を是認し、生活を存續せしめなければならぬ。發展せしめなければならぬ。增進せしめなければならぬといふことを第一の問題とする。生の存續とか發展とか生活性の增進といふことは併し內容を持たない空虛な形式である。人間が共同生活を營むといふ體驗的事實から共同生活性を增進せしめるといふことの內容を一義的に定めることはできない。

人間が共同生活を營み、人間が自己保存の本能を以て行動するといふことや民族的單位に於て運命共同體として生活するといふ民族精神を以て其內容と定めたとしても、その事實から一義的に目的が定まり、其目的が當爲にな

ると斷定することは早計な判斷である。

我々が生活上の當爲の規範を求めようとする時、生活といふことは既に與へられた根底である。我々は生きるといふことに疑ひを挿まうとしない。我々は何故生きなければならぬか、民族は何故生活を續けなければならないかを問はうとしない。社會科學の對象としての問題は生活するといふことを土臺として其上に出發するものである。社會科學に於て當爲の問題とする所は生活する上に於て如何に生きねばならぬか、何の爲に生活せねばならぬかといふことである。

人間の生活が目的生活であり、そのことから直ちに生活を是認し、生活から生れる或目的を是認し、之に規範的性質を認めようとするのは認識批判的に言つて誤りを犯すものと言はなければならぬ。

我々が直接に經濟生活を對象とし、統一的全體性に於いて具體的に之を把握するとしても、「人間の共同生活の生活性の增進」の意味は形式的なものであり、之を當爲の最高規範とすることは無意味である。それは唯々事實の理解といふ範圍を出ることはできない。

經濟を「生活として」把握しようとする時、ゴットルは生活を以て統一ある全體と解しつゝも、經濟を以て共同生活體の一つの部分構成と見、人間の共同生活の全體的範域のうちに之を包攝せしむるといふ分解を行ふのである。經濟とは「欲求と充當（又は充足）との持續的調和といふ精神において構成されたものを、不可分の全體的生活から取出して、部分構成として之を見るのである。

彼は不可分の統一體を二つの階層に分けて觀察し、それ〴〵の階層に就て存在としての正しさから價値判斷を行うことができると說くのである。

先づ經濟の領域に於て、經濟をば生活への構成に依つて成立した經濟構成體として了解する時は、生活への構成としてでき上つた社會構成體の「構成の正しさ」に就て判斷が行はれる。其處では構成的活動がその社會構成體の「生活性を最もよく增進する」に適して居るか否かといふ、謂はゞ「構成上の正しさ」の判斷が問題となる（註）。

（註）ゴットルの社會構成體理論は主として宮田喜代藏氏の「貨幣の生活理論」に依る。

「構成上の正しさ」の判斷は併し究極的な根本標準からする判斷ではなく、第一次的な目標の下に立つ二次的な目標からする判斷である。根本的なる第一次の目標は經濟構成體を全體的な「人間共同生活の生活性の增進」に寄與するか否かであつて、之は「生活上の正しさ」の判斷といはれるものである。こゝでは、人間共同生活の全體的範域の內部に於て共同生活の究極目的に照し、その共同生活の生活性を最もよく增進するに適合して居るか否かゞ判斷されるのである。

「生活上の正しさ」の判斷はゴットルに依れば究極の價値判斷の標準であり、「存在上の正しさ」の判斷とも呼ばれ得るものである。

之に依つて見れば、構成上の正しさの判斷の標準は、結局、其上位に立つ生活上の正しさの判斷から支配されるものであるが故に、價値判斷そのものに對して根本的重要性を持つものと見る必要はない。それは派生的な價値判

斷であり、與へられたる一定目的に從つてする目的――手段の判斷即ち一つの技術的判斷に過ぎないからである。此限りに於て經濟は技術的研究の域に有るものといふことになつてしまふであらう。

蓋し若し斯樣な技術的判斷でなく、經濟の構成上の正しさが獨立の規準であり、構成體の生活性の增進が獨立の判斷を爲し得る資格を其本質に於て持つとすれば、こゝに避け難い矛盾が起るのである。即ち構成體の生活性そのものが先づ共同生活の生活性そのものゝ增進といふことゝ無關係に價値判斷の基準となり、玆に構成體の生活性と共同生活の生活性と二つの獨立の基準が並立することになるであらう。併し之はゴットルの本意ではない。前者は後者に包攝せられるものでなければならぬ。故に兩者が階層的關係に在るといふことは、社會構成體の生活性增進、共同生活の生活性增進に對して手段の地位に在るものと解釋しなければならぬ。

そこで、價値判斷の究極の標準は「生活上の正しさ」に在る。之はゴットルに依れば本來的意味に於ける存在的正しさに根據を持つものであつて、人間の共同生活の範域に於て「人間共同生活の存立と持續の保證」に對する意味に照して判斷することである。

問題はこゝに在る。國民共同生活の存立と持續、又は其生活性の增進とは一體如何なることであるか、これを究極的に是認する意味は、生活するが故に生活の目的は價値があるといふことを是認するのであるならば、それは何等證明に役立ち得ない。問題は曩にも述べた通り、如何に生活すべきか、何の爲に生活せねばならぬかに在るのである。國民共同生活は一體如何なる構成體であり得るのか、それ自體の獨立の目的を何處から得てくるのか。

單純に生活するといふ事實から生活する要求を妥當なるものと主張せられるならば、總て存在するものは正しいといふ何等意味のない結論が生ずるのである。故に存在するものゝ本質を尋ね、生活するものゝ根本の意欲にまで溯つて、此意欲に合致した現實の存り方を以て正しいものとしようとする努力が生れる。ゴットルは、生活の目的は「理性」に依つて正しく定められると說き、之に依つて生活の正しき存在の仕方を了解することができると考へるのである。

併しながら、存在の仕方を理性に依つて正しく了解することができるとしても、問題は依然として解かれない。或る目的が生活の現實の存り方から理性に依つて正しいと了解され得たとしても、斯樣に了解されたる目的の何れを以て最高の標準として取上げなければならぬか、それを何の標準に依つて求めるかといふ問題が殘るのである。或は又假りに生活の現實の存在の仕方から唯一つの目的が生れて來たとしても、然も猶ほ之を規範たる地位に高めうるや否やは問題として殘るのである。

ましてゴットルに於ける樣に存在の正しさとして要求する所の究極の標準が共同生活の生活增進性とか、欲求と充當の持續的調和といふ內容の空虛なるもので在る場合には、此命題から直ちに人の行爲の規範を求めることは至難である。生活增進性といふことの中にはあらゆる可能な目的が考へ得られるであらうし、欲求と充當の調和に至つては、人間生活の一切の欲望を一應承認せんとするものである樣な觀を與へるのである。

ゾムバルトが正しく指摘する通り、或る目的を內的經驗から又は明證に依つて「達せねばならぬ」ものとして定め

る爲には、必ずや先驗的なる要請がなければならぬ。「若し我々が一つの主張の明證を證明しようとするならば、問題はこうである。即ち當該命題は先驗的に確立して居るかどうか、である」（註）。

（註）Sombart 前掲書七五頁

ゴットルの流を汲む所の學者ワイペルトは、ゾムバルトの「理解」の解釋を非難し、それが人間の動機論に終始するが故に不充分であると述べて居る。彼は存在の本質が內的經驗に依つて直觀されるといふことを說く、內的經驗に依つて直觀される所の存在の本質は、ゾムバルトやウェーバー流の歷史や外的經驗の社會科學を說くものには判らないのも當然であると說く。ワイペルトに依れば、論理的認識ばかりでなく、內的經驗即ち宗敎的認識も形而上學的認識も美學的認識も凡て科學の中へ組み込まれる。ゾムバルトが一方に知識即ち論理的思惟と、他方に信仰、愛情、畏敬とを區別したのに對し、ワイペルトは「科學の名に於て、認識の客觀性の名に於て」抗議を申込む（註）。

（註）Weippert: Vom Werturteil zur politischen Theorie, Weltwirtschaftliche Archiv 1939, 一七頁以下參照

若し存在の本質の客觀性と同時に信仰や愛情の客觀的妥當性が證明されるとするならば、その信仰の名に於て、其愛情の名に於て當爲の判斷を爲すことができる。併し或る信仰の客觀的妥當性は如何にして證明できるのであらうか。我々は內的經驗を通じて信仰の意味、愛情の意味を了解することができる。或る存在の性質として之に伴ふ意欲を理解できると同じ意味に於て信仰も愛情も了解できるであらう。然し理解するといふことは飽くまで理解に止まるのであつて、之を恕すといふことでもないし、又之の規範的通用力を證明することでもない。

或る信仰が現實に基礎を持ち、或る世界觀が歷史の中に其根據を持つといふことは、理解に依つて之を說明できるであらう。併しそれは唯說明し得るといふに留まるのである。說明するといふことは必然性を證明することではない。理解することが同時に必然性を證明することに爲り得るならば、總ての認識は、科學的なるものは勿論、信仰にしても世界觀にしても何でも必然性を備へるものといはなければならぬ。假にワイペルトの考へに從つて「理解」に限界を設けず、一切の社會現象を內體經驗に依つて主體的に了解し得るとするならば、人は之に依つて一切の社會科學的存在を意味づけることができるであらう。併しそれは結局意味の相對性を生み出すといふ結果に終るのであつて、或る存在の或る一つの意味を特に絕對的なものとする根據を生み出し得ないであらう。それは丁度色色な人々が或食物に就て有する嗜好の情を醫學的に或は心理學的に說明することができても、それで說明が完全であるとしても、其說明に依つて、或一人の人の嗜好が是認され、他の人々のそれが否定されることになるのでもないのと同樣である。其食物を食すべきや否やは或る別の觀點から、例へば健康保持といふ點から或は快樂增進といふ觀點からなされなければならぬ生活の目的を是認するには、生活以上のある觀點の上に立たなくてはならぬ。

五　目的論的觀察方法

理解することから直接に或目的の必然的妥當性を導き出すことは、如何なる意味に於ても社會科學——ゾムバルトの言ふ文化科學——の領域を逸脫するものといはなければならぬ。

人間の共同生活が意味を持つた目的生活であるといふことから我々が目的論的觀察を爲すことはできる。即ち人

間の生活を目的に對する手段の關係に於て之を分析觀察することは確かにできる。併し此事は或る當爲の絶對性からする判斷が可能であるといふ意味ではない。其意味は、人間の目的生活よりして如何なる目的が立てられ、如何なる手段が選ばれて、如何なる經過に於て此關係が營まれて居るかを了解することができるといふことである。即ち立てられたる目的を說明し、之に達する必要な手段を論理的に判斷することができるのである。此見方其自體は故に何等絶對的なる價値判斷ではなく、一定の目的に從つてする論理的判斷又は技術的判斷の域を出づるものでない。今日國防經濟學と呼ばれる所のものは、若しそれが國防經濟の建設とか、戰時經濟組織の編成といふ意味で說かれるならば、即ち此技術論に屬するものである。之が目的論的觀察方法を採用するとしても、それは顚倒せられたる因果的判斷と等しく、論理的判斷の域を逸脫するものではない。從つて之を特殊なる經濟政策論と認めることができるし、又之を强ひて政治經濟學と稱したければ、稱しても自由勝手である。併し今日の政治經濟學が目指す所の意味に於て政治經濟學であるといふことはできない。理論と政策を統一しようとする立前からいふならば、國防國家以上に在る所の目的と其當爲としての該目的の必然的妥當性に就て證明する所がなければならぬ。

我々が目的論的觀察を爲し得る限度は、諸種の目的に通ずる諸種の手段を分析し判斷する以上を出るものではない。此意味に於てロベルト・ウィルブラントが、經濟政策を經濟的忠告と呼び、經濟政策上の目的をば「分析的目的」（analytisches Ideal）と呼んだのは頗る興味がある。忠告（Beratugn）といふ意味は、文字通り忠告であつて、必然性を要求する命令ではないのである。或目的達成に適當な手段を講ずるといふこと以上を出ないのであつて、其目的を强制する資格を持たないのである。分析的目的といふことは經濟上の目的の分析から實證的に之を選ぶといふことであつて、「目的設定に對して何等新規のものを附加へるのでもなければ、又最高の評價を樹立するものでもなく、更に又敢て形而上學的な主張を冒するものでもない」（註）のである。

（註）Wilbrandt, R.: Das Problem der Volkswirtschaftspolitik 1925 一九頁

此樣に實證的分析から、選び出されたる經濟の目的を定めて、其範圍內に於て經濟政策を講ずるならば、之は技術的な意味を持つた一つの經濟政策論として意義のあるものといへる。

六　歷史的必然性の意味

上に述べた通り、社會現象の理解に終始する限り、人間の當爲の目的は確立せられない。經濟政策論は實證的ならんとする限り、ウィルブラント流に謙讓でなければならぬ。

然るに究極の目的の必然性に就て、人間の經驗や體驗の世界から之を立證することが許されないといふことは、即ち反面に於て、人間の生活上の目的追求に關して歷史的必然性といふことをいひ得ないことを意味する。此處に歷史的必然性といふ意味は、或目的の追求達成が、過去の歷史的生起から必然的に要求され、他に如何なる方法も目的も追求され得ないといふ意味である。即ち若し此必然性に背いて或る他の目的が追求されるとしても、それは必ず成功しない、失敗する。然かも其失敗する理由を過去の歷史の內に持つといふのである。若しも此意味に於ける歷史的必然性が假に樹立されるとすれば、斯る歷史法則に從つて歷史と理論と政策とは統一されるであらう。存

在から、歴史から必然的な目的が要求されるならば、斯る目的は歴史的當爲として客觀的妥當性を持つに相違ない。而して人々は此目的に從つて行動する時にのみ自由があり、之に反して行動する時には自由はないといふことになるであらう。

果して歴史の必然性なるものがあつて、人間の行動を束縛するであらうか。人間の行動が歴史の必然性に從つて行動する時にのみ自由であり、必然性に背いて行動する時には不自由であるといふ説明は是認せられ得るであらうか。物質主義者は、斯る歴史法則の根據を、歴史の起動力としての物質的生産力に求め、且つ人間の唯一の動機として經濟的利害の貫徹に求める。即ち人々は總て經濟的利益の爲にのみ行動するといふ、抽象的な「理解」方法を取るのである。而して一切の他の觀念的動因例へば人間の名譽心、眞理と正義に對する感激、あらゆる種類の各人の憎惡、或は純個人的憎惡は殆ど常に意欲せられたる結果と全く異る結果――否時によると正反對の結果を生むものであり、總體に對して從屬的意味を有するに過ぎないと視るのである。

斯くの如き必然性論に對して我々は二樣の反駁を爲すことができると思ふ。

第一に若し斯くの如き歴史的必然性が定まつて居るとすればそれは結局決定論に落入るといふこと、

第二には人間の行動は單に經濟的利害にのみ換算されて定められるのでなく他の「觀念的」動機も亦行動の決定に參加し、歴史の進展の一要因となるといふことである。

第一に就ていふならば、人が必然性に從つて行動する時に自由があり、然らざる時は不自由であるといふことは結局人間に意思の自由はないといふことに歸着する。人間は欲すると欲せざるとに拘らず定められた歴史的進路を歩んでゆかなければならぬといふことに歸着する。或は又、各人に各人の意慾の物質的根據を説明することによつて、其必然性を證明するとすれば、一切の人間の目的行動は歴史的必然性に依つて是認されるものとなるべく、或る人々が共産主義の爲に行動するのも、將た又他の人々がファッショ主義の爲に行動するのも共に歴史的必然性の名に於て是認されることに爲るであらう。而して共産主義者が自己の主義の客觀的妥當性を主張すると同じ資格に於て、ファッショ主義者は其主張の客觀的妥當性を要求するであらう。斯くの如き事態は、「客觀的妥當性」それ自體を無意味ならしめるものであつて、當爲の規範たる資格を持ち得ないことは明かである。

我々はかゝる決定論に反對し、意思の自由を主張するものである。我々が意思の自由を主張し、目的行動の意味を主張する時、それは勿論意思が無原因的に、無意味に働き、行動が自然科學的法則や社會科學的法則に無頓着に營まれるといふことではない。人間が意味ある行動をする時、常に過去の經驗的知識と、經驗法則の類推的知識が其基礎になる。人は之を基礎として達成し得べき目的を選擇し、又同樣な考慮に依つて目的達成に必要な手段を選擇する。人の目的行爲は自然現象に於ける自然的因果律を無視するのでなく之に從ふのである。例へば人が水力電氣を起さうとする場合に低きにつく水の性質を無視しないで、寧ろ之を利用するのである。或道路を建設しやうとする時に途中の高低屈曲は總て自然法則を利用して之に從つて定められるのである。人は唯幾多の水力利用の方法

の中の何れを選んで採用するかといふ最後の問題に於て、一切の周圍の客觀的條件の考慮の後に主觀的欲求が決定するのである。こゝに目的の意味があるのである。此目的は歴史に、存在に根據を持つ限りに於て、之を理解的に又は因果的に說明することはできる。併しそれのみから此目的でなければならぬといふ必然性が證明される譯ではないのである。

而して目的の斯る解釋を是認する以上、規範的科學の、認識論上の要請として、形式的の極限概念――即ち窮極目的――を想定しなければならぬ。そして人々の目的生活は總て一切の經驗を超越せる先驗的なる窮極目的を內に抱いて進むものと考へなければならぬ。それは、人の目的行動の合法則性の形式的基礎を與へるものとして「一切の可能なる目的觀念の最高の一般妥當なる統一」（註）であるのである。

（註）Stammler: Wirtschaft und Recht 1924 第五版、三四八頁

かゝる認識論的要請は現實の社會に於ては例へば今日ナチスの世界觀や、ファッショの世界觀等の形に於いて最も明瞭に代置されて居るのである。

第二に、歴史的必然性が單純なる自然的必然性でなく、諸々の觀念的動因の働きを認めるとすれば、然る時は必然性は決して或目的の客觀的妥當性を主張し得なくなるのである。

社會の上層建築と下部構造との關係は主として一方的であるが、併し全然そうであるのではなく、「從屬的意味に於て」上層建築が下部構造に影響を及ぼすことは物質主義者に依つても認められる。

併し一體從屬的意味とはどういふことであるか、若しそれが下から上への影響力に對して何等影響を及ぼさぬものであるとすれば、從屬的といふことは意味を爲さぬ。若し上からの影響が下の構造に多少なりとも變化を與へ、其結果として下からの上への影響も多少相違して來るといふのであるならば、その時は縱令ひ從屬的といふ言葉が使はれて居るにせよ、人間の觀念的生活が其物質的基礎に對して影響力を持つて居るといふことにならざるを得ない。社會的、政治的並びに精神的生活は物質的生活の生產方法に變化を及ぼすことが認められざるを得ない。然る時は物質的生活の生產方法は、歴史の發展に於て唯一の根本的原因として作用するのでなく、一つの根本的條件として作用するものと見直さなければならぬ。

更に之を人間の目的の動機について述べるならば、物質的利益の追求、人々の物質的利害の對立丈けが歴史の起動力と爲るのでなく、觀念的動因も亦個々の人間に於ける動因に留まらず、大衆を、諸民族の全體を……動かす所の動因たる役割を果すものと見なければならぬ。元來物質的生產力といふ言葉の意味は頗る曖昧なるものがあり、此生產力自體が他の社會的事情に依つて決定されるものと觀られなければならぬものである。

人間生活の目的は經濟的利益許りでなく、人間は經濟的利益の爲に階級的對抗を爲すものでなく、社會の進展は物質的生產力のみに依つて動かされるものでないとすれば、唯物的理由に依る歴史的必然性は到底立證せられないことに爲るのである。而して事實人間生活の目的が物質上の利益獲得のみにあるのでないことは、之までの人間の歴史が何よりも雄辯に物語つて居る。我々は唯こ或る歴史上の出來事に就て何等かの經濟的理由を見ることができる

に止まるのであつて、其理由が當該事件の最も重要な原因と見られることもあるし、又餘り重要ならざる原因とも見られることもあるのである。重要な原因としても、將た又重要ならざる原因としても、唯こ原因がある、動機が見られるといふことから當該事件の必然性を云々するのは、必然性といふ言葉の濫用であつて、それは論理的な誤りか、然らずんば單なる形容詞的強調の意味を含ませられたものと解しなければならぬ。

唯若し人間の行爲が凡て經濟的利害の貫徹を唯一の動機として活動するものであるならば、唯物的な歴史解釋は正しいであらう。然る時は經濟的原因を說明することは、同時に經濟的目的を說明することに爲る。歴史の變化を經濟的に正しく了解することは、歴史の必然性を豫言することに爲るであらう。而して人々は唯こ此必然性に從つて行動する時にのみ自由があり、然らざる時には自由が無いであらう。此意味に於て歴史的存在の說明は歴史的當爲の樹立とたり得るであらう。

併し人間が經濟的動物でないとすれば、物質主義の歴史解釋は正しくない。それは唯こ人間生活の歴史に於けるを指摘するに止まる。唯こ此一面的觀察から一切の必然性を要求するのは論理的潛越の誤を犯すものである。

七　世界觀の問題

現代の代表的な全體主義の思潮と見られる所のヒトラーの思想にしてもムソリーニの思想にしても、其最も大な共通の特徴は前時代に支配的であつた此物質主義思想を打破することであつた。人が單に經濟的利害の打算から階級を結成し、その爲にのみ行動するものでないことを實證し且つ又捉はれたる人々に之を說く爲に、此人達は民族精神を鼓吹し、國家的統一を强調し、而して國民主義の團結を說敎したのである。「經濟は運命に非ず、政治こそは運命なり」といふナチスの標語は、此精神を端的に表現するものに外ならぬ。

「經濟的時代に於ける經濟の地位は、ユダヤ人ラーテナウの『經濟は我々の運命なり』といふ言葉に依つて特徴づけられて居る。此解釋はマルクス主義に依つても代表されて居る。蓋し自由主義とマルクス主義は同じ物質主義の上に立つものだからである。國民社會主義は之に對し意識的に「政治は我々の運命なり」といふ命題を打立てるものである」

とはナチス經濟年鑑の記す所である（註）。政治が經濟に優越するとは實に斯くの如き意味の下に解して正しいのである。

（註）Jahrbuch der nationalsozialistischen Wirtschaft 1937 二一―二二頁

我々はナチスやファッシ■の世界觀の由來を說明して之を歴史的產物であると見ることができる。かゝる思想の發生の根據を尋ねて歴史の中に其經濟的理由を見出だすことができる。而して若し其理由に基いてナチスやファッシ■の歴史的必然性を說くならば、それは正しくない。蓋し我々は或原因が在るといふこと丈けから直ちに必然性を證明する資格を持ち得ないからである。一切の出來事は總て原因を持つからといふ理由で一切の出來事に必然性の刻印をおすことは、少しも必然性の說明になるものではない。人間の目的生活は總て過去に存在の根據を持つて未來へ流れてゆくものであるから、それに因果的關係を附けることは容易である。或る目標を選び、或世界觀を組

立てる所の人間の精神活動は總て經驗的知識の所產であり、其知識の類推、應用の結果である、略言すればそれは歷史的記述と理論的分析の綜合の結果生れるものである。人々の目標の選擇や世界觀の樹立は單なる忘想や空虛な恣意から生れでる限り、社會的には何等注意すべき價値を持たぬであらう。或世界觀が一時代に於て支配的な、或は兎に角重要な勢力を得るには、それがよく了解し得る意味を以て歷史の內に深い根據を持ち理論に依つて合理性を裏付けられ得るものでなければならぬ。

此意味に於て規範的なる根本目標、或る超經驗的なる世界觀的判斷の標準が歷史的なる現實の中から生れるといふのは正しい。それは寧ろ自明的なことであるとさへいへる。只問題は歷史の內から見出される色々な目標の內何れを選び、而して其一の目標を如何にして當爲の規範とするかに在るのであつて、此點に於て單に歷史的又は理論的說明のみから決定原因を求めることが許されないといふのである。其處には或る形而上學的な要請、宗敎的な信仰、主觀的な世界觀等の如き經驗の領域を超えたあるものゝ裏打ちが必要なのである。

而して人間は其生活の究極目標の選定、當爲の規範の確立に於て、斯くの如き超經驗の領域に依據し之に訴へることができればこそ、意思の自由に意味を帶ぶることに爲り、政策（政治）に意義が備はることになるのである。人は社會的なる經濟法則に服從しないで、之を可能なる限度に於て變改することができるのである。歷史的發展の意義も亦其處に在ると見なければならぬ。

此點より見れば、ナチスが其國民社會主義の最も重要なる任務としてドイツ國民の世界觀の變革と經濟に於ける經濟的性向の變革を說いて居るのは正當なる態度である。然かもナチスの北方民族主義の世界觀と共同體主義の經濟性向とは、それが如何にドイツ國民生活の歷史の內から必然性の名の下に主張されようとも、唯之を可能なりし目的の一つを實現しようとするものと解釋する時に於て我々は正しいのである。

ドイツ歷史學派の人々の現代に於ける復活は實に此意味に於て再認識されつゝあるといへよう。即ち古典學派に依る自然的經濟法則の支配に對抗して、人間の精神の歷史構成力を强調する所にリストやシュモラーの現代的意義があるといへるであらう。又ゴットルの生活經濟學の思想にしても、彼の云ふ所の民族共同體の意味をナチスの考へる所の民族共同體に解する時に初めてそれは具體的な意味を帶びてくるといへよう。此に就てヘロ・メラーの言ふ次の言葉は如何にも正しい。即ち

「（ゴットルの）民族共同體の概念はナチスの意味に解して初めて本質的特徵として一定の實質的內容をかち得るのである。而して此特徵の價値性は認識に對する或る單なる努力の結果として必然的に生ずるものではなく、寧ろ世界觀的體驗と決意から生れ、而して斯くして生きたる、意思決定的な力にまで高められるのである。斯くの如き實質的な決定がなく、更に又之と共に具體的な世界觀的背景なくしては、民族共同體の概念は諸構成體に於ける各種方策の價値判斷を導き出すに適するものではない」と、（註）。

（註）Moeller, Hero: Wissenschaft und Praxis, Finanzarchiv 1939 第六卷三四五頁

政治經濟學は故に或る世界觀的背景を持てる規範的經濟學であるといふことができるであらう。ドイツに於ける

政治經濟學は、ナチスの世界觀の下に於て初て成立し得るのである。イタリーに於ける政治學は、ファッショの世界觀の背景の下に成立し得るものである。而して此事は他の國々の政治經濟學の樹立に際しても當嵌めることができるであらう。

公債とインフレーション

――フランスに於ける經驗――

永田清

一

私は曾て公債論の三つの型を論じたことがある（本誌三十三卷九號）。その場合、論究の對象としたものは、從來行はれて來た公債の理解が新しく國民經濟の內的關聯に引戻されねばならぬ點を指摘するにあつた。しかもこの內的關聯をみる契機は國民經濟の總過程に關與する國家政策の登場におかれる。殊にこの場合の公債の役割は國民經濟の波動に關聯するものとして、その積極的意義が信用機構を通じて示される事實にみられるところであつた。したがつて、この範圍內において明らかにせられる公債の意義は國民經濟の順當なる發展に限られるものである。しかるに公債はたゞかくの如き經濟的要求のみに屬するものではない。謂はゞツァハマンの總就業線（註一）にとゞまるものとして公債を論ずることは、公債問題のすべてを蔽ふものではないのである。公債は戰爭その他の政治的要求に應じて增發されざるを得なくなり、そこに一層根本的なインフレーションの問題を含むものとされる。かくて